Vitalité インタビュー

人はどこへ往(ゆ)くのか

青木　新門

聞き手：佐多保彦　株式会社東機貿 代表取締役社長

青木　新門 / あおき・しんもん
1937年、富山県生まれ。早稲田大学中退、作家、詩人、冠婚葬祭を扱うオークス株式会社取締役相談役。著書に、『納棺夫日記』（第7回地方出版文化功労賞受賞・桂書房）、『木漏れ日の風景』（北日本新聞社）など。本名は幸男。

佐多：葬儀の仕事を始めてから4年ほどで、2000もの湯灌(ゆかん)・納棺をされたそうですね。

青木：ええ。ひょんなことから冠婚葬祭の会社に入りましたが、始めはイヤイヤでした。誰もやるものがなかったから、こればかりやっていました。3カ月後位から段々腰が座って、白衣や手袋を着け、礼儀や言葉づかいなどにも気を配るようになると、段々仕事が増えていきました。盆も正月もなく、一日に2件も3件もやりました。とうとう「納棺夫」になってしまった、と思ったものです。

あらゆる仕事の中で最下位、タブーの世界です。「穢らわしい」とか「親族の恥」とまで言われ、家族はもちろん親戚じゅうに反対され、一時は付き合いまでことわられました。

佐多：それでもお辞めにならなかったのですね。

青木：そうですね。何故だかは分かりません。しかしその根底には、私の8歳のころの体験が埋まっているように思います。

終戦を迎えた旧満州で、日本への引き上げを待つ間、難民収容所に隔離されました。食べ物はコーリャンと岩塩だけ。栄養失調のところへチフスが蔓延し、冬が来ると毎日のように誰かが死んでいきました。5歳の妹が死んだときも、くすぶっている石炭の上に置いて来た。翌日見に行くと、燃えてなくてカンカチに凍っているんです。零下30度の世界です。この記憶は消えないですね。

佐多：・・・・そうですか。

仕事とはいえ2000もの遺体に接すると、見えないものも見えてくるのではないか、と思うのですが。

青木：納棺夫は10年間続けました。3カ月も放置された蛆(ウジ)だらけの死体や腐乱寸前の水死体にも触れました。昔は農家などの自宅で亡くなった枯木のような死体が多かったんですが、高度成長の頃から病院死体が増え、ぶよぶよしたものに変わっていきました。栄養点滴などのせいでしょうね。

鑑識課の医師や看護婦長さんの中にはもっと多数の死体を扱った人もあるかも知れません。ただ、死を見つめるスタンスが人それぞれ違うように思います。僕の場合は「人間、死んだらどこへ行くんだろうか」ということばかり考えた。〈往生〉ってどういうことなんだ。他人の死を自分のこととして考えずにいられなかった。で、宗教の本を読むようになったのです。

『死ぬ瞬間』を書かれたエリザベス・キュブラ・ロスさんは「私は神というのは、一つだと思う」と言っています。でも、「私の国の人々を納得させるには、キリスト教的にならざるを得ない」とも。これと同様に、私は仏教的にならざるを得ないのですね。いくら他の言い方をしても、自分の文化や言葉のルートを通っていかないと心から信ずることはできません。まして田舎のおばあちゃんを納得させることはできません。僕が最終的に浄土門の勉強をするようになったのは、阿弥陀というのはサンスクリット語で〈光〉と〈命〉なんだということを知った時からです。ハッとしましたね。

交通事故で若い母親が亡くなった家に行った時のことです。5歳位の子が「おかあちゃん、まだ眠っているの？」と不意に言ったため、2歳位の子を抱いた老婆が畳をたたいて号泣し、納棺どころではありません。やっとのことで仕事を終え、庭に出ると、鮮やかな今年の竹に何か光るものがある。よく見ると透きとおった胎内に卵をびっしり抱いた糸トンボでした。数週間で死ぬ糸トンボが、3億年の昔から命をつらねていることを思うと涙が出ました。

死んだ人はほとんどが安らかな顔をしています。生前、善人だったか悪人だったかなどということには一切関係がありません。

宮沢賢治が死の床で血を吐きながら書いた「眼にて云ふ」という詩に、

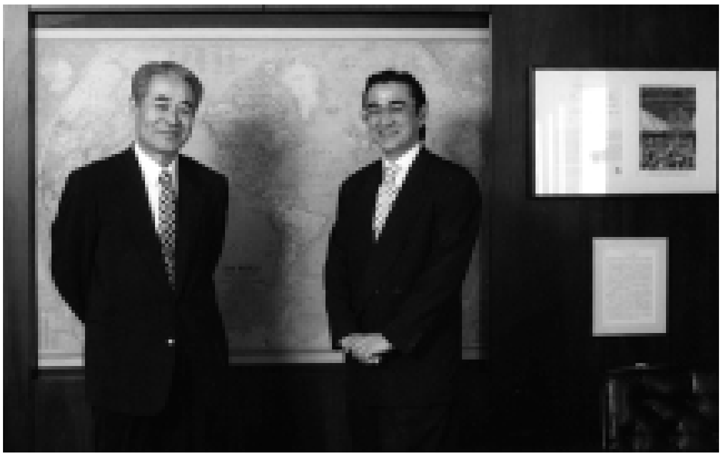
こんなに本気にいろいろ手あてもしていただければ
これで死んでもまづは文句もありません
・・・・
あなたの方からみたらずゐぶんさんたんたるけしきでせうが
わたくしから見えるのは
やっぱりきれいな青ぞらと
すきとおった風ばかりです

というくだりがあります。これは生も死も超越した視点です。

佐多：そのような世界をご著書につづられたのですね。

青木：死に携わる心の葛藤を鎮(しず)めるために、自分一人のために書き始めました。「自分は何ものであって、どこへ行くのか」、これさえはっきりすればいいのです。

人間、行き先と行き方が大事だと思う。行き先というのは目的、



結論のイメージです。単純化して言えば、南無阿弥陀仏でいいわけですよ。ところが最近は行き方ばかり気にするようになって、行き先がわからなくなってきているんじゃないですか。

友人の話ですが、母親が病院で亡くなる時にお経を聞きたいと言い出したんだそうです。熱心にかよっていたお寺の住職の声で聞きたい、と。友人は病院と折衝し、お寺に行って頼むが、病院は許可しない、お坊さんも「病院が嫌がるでしょう」と渋る。思い付いてお経をテープに入れ、それを病室に届けたんだが、ちょうどその時に母親が死んじゃった。だからお母さんはお経を聞けなかったんですね、後生の一大事に。僕は現場のこういった問題を解決できなければ、今の脳死の問題は解決されないと思いますよ。

佐多：僕も経験しましたよ。父が死ぬ前の治療期間でしたが、治療をする医師や看護婦さんに、病室から出て下さいと言われました。僕は部屋から出ずに傍らで治療をながめていました。きっと嫌がられたことでしょう。

青木：死の直前、人間が全身で死を受け入れた時、必ずと言っていいほど「ありがとう」と言いたくなる。口がきけない場合でも、目で言う。そのたったひと言で、残された人がどんなに救われるか。その瞬間を医師がはずす、ICUに入れない、これは問題だと思います。

佐多：僕は父が死んだ瞬間に、本当に心の底からご苦労様でしたと言いました。死は、遺族にとっては無論悲しいことですが、本人にとってはルネサンス（再生）ではないでしょうか。つまり大きな意味で、実におめでたいできごとのように思います。

青木：親鸞の「われ閉目せば加茂川へ入れて魚に与うべし」という言葉は有名ですが、もうひとつ「おめでとうございますといいなさい」という意味の言葉があります。僕もそう思っています。明るい世界へよみがえるだけだ、と。肉体という衣を脱いでね。

だけど、人間は生きている間は不安でしょうがない。そういう人たちに、そうなんだよ、生も死もないんだよと説くのが宗教なんですね。人は生の側（此岸）から死の側（彼岸）を見ているために、向こう岸は見えないんです。神や仏の視点は、その両側を同時に見ています。そんな処（ところ）から見れば生も死も善も悪もない。あるのは欲望と自我と生存競争があるだけでしょうね。

この間インドの火葬を見たいと思って行って来ました。公営の焼き場もあるんですが、そこに行けない人たちも沢山いる。下層カーストの人は牛フンかなにかで焼くんだが、半なまのようなのを河に流すんですね。しかも乾季の渇水期でしょう。すぐ側にハゲタカみたいなのが飛んで来ている。実に、生も死も善も悪も混沌と同居しているような世界ですね。

佐多：ガンジス河で沐浴する人々も、そんな死体が流れて来たらそっと手で押しやって流してあげ、全くなにごともなかったように顔を洗い口を漱（すす）いでいるそうです。このような、生きていることも死んでいることも同じ、そんな境地が〈悟り〉だと感じたのですが。

青木：僕は正岡子規が七転八倒の病床で言った「どんなことがあっても平気で生きる」というのが〈悟り〉だと思う。逆に「平気で死ぬ」というのはどうもヤケクソで、特攻隊とか三島由紀夫の世界だという気がします。

佐多：ところで、ご著書の『納棺夫日記』はベストセラーになりましたが、そのことで何か変わりましたか。

青木：葬儀屋のイメージが変わったことでしょうか。お寺などで一目置いていただけるようになったことが一番嬉しかったですね。それまでは土下座をしてお布施を渡していたのが、逆にお礼をいただくようになりました。

今度われわれ葬儀の団体で労働省に働きかけて、葬祭ディレクターという資格制度を設けようとしています。アメリカでは大学で2年間、解剖学などの勉強をしなければエンバーミング（遺体衛生保全）の資格がとれませんし、葬儀社も弁護士資格がなければ開業できません。それに近いような形をとることが日本の国で葬儀に携わる人たちの社会的地位を上げる第一歩だと思います。我々としても、式次第や司会進行だけでなく、衛生学やら宗教、民族学の知識も身につけなくてはなりません。

日本人の中に、穢れたものは遠くに、汚いものには蓋という意識があります。が、この発想を変えないと駄目だと思います。焼き場は街の中心から最も離れたところ、つぎに老人施設、そして心身障害者施設。これはうば捨て思想ですね。そんな発想を180度変えて、汚いものは清潔に、穢土は浄土にといった〈生死一如〉に生きる思想を具現したいですね。それには、携わる人間が努力していくことが大事なんでしょうね。

（写真：小池　守）

V I E W

医療の安全を高めるために

加藤　良夫

医療の安全に関する研究会理事 / 弁護士

加藤　良夫 / かとう・よしお
1948年、名古屋生まれ。71年、中央大学法学部卒業。74年、弁護士登録。77年、医療事故相談センター開設。86年、日本弁護士連合会人権擁護委員。91年、患者の権利法をつくる会常任世話人などを経て、95年、医療の安全に関する研究会常任理事。著書に『患者さんの望む安全な看護とは?』(ふれあい企画)『医療過誤から患者の人権を守る』(ぶどう社)など多数。

医療のあり方に関する社会的な関心が高まっている。とりわけ、薬害エイズや医療過誤による訴訟問題、インフォームド・コンセントの是非、カルテ開示などの問題について、医療に携わる側と受ける側との間に深い溝があることが浮き彫りにされてきた。

そこで、より良い医療にするために、「医療の安全に関する研究会」（以下研究会）が平成7年12月に発足した。その発足に際して中心的役割をした、常任理事である弁護士の加藤良夫氏は、その前身の調査会と研究会の違いをこう指摘する。「医療事故調査会は事故が起こったときにその内容を第三者的に評価する目的で設立されました。研究会はそれとは別に、広くさまざまな人の参加を得て医療の安全を高めるための提言をしていこうというものです。つまり研究会は、現実に『医療事故が起きた』『被害にあった』という問題だけでなく、事故に至らなかった『ニアミス』からも、より安全な教訓を引き出していくものです」

この「医療の安全に関する研究会」の参加者は約300人。多くは医療従事者で構成されているが、一般市民とくに医療事故にあった人やニアミスを体験した人、あるいは医薬品や医療器械の安全性を考える専門家など、医療の安全について関心がある人なら誰でも参加し提言できることになっている。

医療事故から教訓を引き出すシステムを

研究会の具体的な活動については、当面は「麻酔」や「在宅医療、看護」「分娩」「医薬品の安全性」「医療廃棄物処理」などが、主なテーマになってくる。今年3月には、「麻酔の安全に関する分科会」が岡山で開催されたのを初め、それぞれ分科会として活動が展開され始めた。加藤氏が、弁護士としていままで取り扱った医療事故に関する事例の中でも、とくに「麻酔による事故」が我国では多いという。「日本の事故全体を把握はできていませんが、とくに麻酔事故でも脊椎麻酔の事故が目立ちます。それは、脊椎麻酔は盲腸やちょっとしたヘルニアの手術で一般の開業医でも行っているわけで、麻酔科の専門の医師が不在で執刀医が麻酔をするケースなどで起こりやすくなっています。

たとえば、急に血圧が下がり、呼吸困難になる。こうした事態は稀にしか起こらないから、対応が十分できていないとパニックになる。

そんな事故をなんとか減らしたい、ということで、東京逓信病院・前病院長の北原哲夫先生などが、昭和30年代から安全対策として、『血圧は頻繁に計ってください』とよびかけていました。製薬会社にも働きかけて、薬の能書に『麻酔剤投与後15分以内は、血圧を頻回（2分毎に計る』と記した時期もありました。

ところが、残念ながら、繰り返される医療事故の問題について、そこから尊い教訓を引き出して医療現場にフィードバックしていくシステムが確立されていません」

毎年1万人に近い犠牲者を出す交通事故なら、道路交通法で必ず警察に届出る。従って、警察は現場を調べその事故を把握し、しかるべき対策を講じることができる。事故が多発する道路には、信号を付け替えたり歩道橋を設置して、再発防止に備えるかもしれない。ところが、医療事故の場合、年間何人の人が亡くなっているかすら統計的には把握できない、調べる手段がないと加藤氏は指摘する。「医療の世界は密室です。どうしても、手術室や分娩室、処置室の中で起こったことは第三者にはわかりません。しかも、病状が悪化して亡くなったのか、病気は安定していたがある医療行為が原因で亡くなったのか、専門的知識がないとなかなか判断できません。たとえばガン患者が亡くなった場合、ガンそのもので亡くなったか、化学療法の薬の副作用で亡くなったか、あるいは別の過ちがあったかは担当者にしかわからないでしょう。

患者側にしてみれば、『ガンだったのだから仕方ない』と思う人が多い。たとえ医療過誤があったにせよ、事故が起きたことに気がつかないケースもあります。

ニアミスの事例もあります。看護婦さんが毎朝糖尿病患者にインシュリンの注射を打っていたのが、人違いをしました。そのうち、糖尿病の患者が『いつもの注射がまだ打たれていない』と言い出して、調べても記録では打っている。誰に打ったか、探したわけです。人違いで打たれた人は当然血糖値が下がって、放っておくと低血糖で病態が悪化するところでした。

こんなちょっとしたケアレスミスも重大な過誤も、一つ一つの尊

い犠牲から教訓を引き出さないまま進むと、同じ失敗を繰り返すことにもなりかねないはずです」

医療事故の再発防止への課題

いったいどうすれば、医療事故の再発を防止し、より安全な医療を目指すことができるのか。課題はいくつかあるが、要点をまとめてみると。

● 医療事故の申告、報告のシステムづくり

「とりあえず、いま産婦人科の妊産婦死亡のケースで、報告することを義務づける必要性を感じています。また手術中の事故か、一週間後か一か月後かなど期限を切って、ミスがあろうとなかろうと一度専門家がレビューをすることによって、不都合はなかったかなどをはっきり調査していく。これが対策を打ち立てる第一歩だと思っています」

● ピア・レビューの重要性

「ちょっとしたミスを早く気づけばよかった、というケースが多い。チェックする機関がたくさんあればいいのはもちろんですが、さきほどの看護婦さんのニアミスにしても、ミスがわかるのは仕事をしている仲間が一番見抜けるわけです。そこで、ピア・レビュー（同僚の評価、批判）をちゃんと機能させていくことがまず大切だと思います」

● 安全のための提言

「たとえば、笑気ガスと酸素のパイプをつなぎ間違えたという事例から、バルブの色を合わせておくとか、コネクションの形を構造的に異種のものにはつながらないようにするとか、間違いがあると警報ベルが鳴るとかさまざまな対策を引き出していくものです。

つまり、安全を高めるということは、何も事故だけを研究するのではなくて、ニアミスや事故が起こりやすい背景を調べ、再発防止対策のマニュアルづくり、ガイドラインづくりをすることが必要だと思うのです。そういう意味で、提言型の研究会として、より安全なものをつくっていくための一つのたたき台を提案する。これが研究会の特色です」

● 患者の権利の確立

「研究会のもう一つの特色は、専門家だけの集まりではなくて、医療の受け手や被害にあった人たちをも含めた市民参加型の研究会になっていることです。

いま、安全を考える場合、なぜ市民の参加が必要か。たとえば、スリーマイル島の原発事故が起きたとき、当時の大統領は事故調査に『市民』を加えたのです。それは、原子力の技術者だけでは気がつかない、素人から発する新鮮な疑問をぶつけることで、新たな視点が出てくる効果があると期待されたからです。

医療の世界でも、ドクターがすべて正しい医療を提供し、患者は単に受け手であればいい、という姿勢は間違いであると思うのです。つまり、納得のいく医療をしていくためには、患者も参加して疑問点を十分話してもらい、納得してから受けることです。あるいは、専門家の意見にも、A、B、Cという選択肢に分かれるケースでは、患者はAを勧められてもBやCを選択していい。また、主治医はなぜAを勧めるのか、なぜB、Cではいけないかを十分ディスカッションをして、そういうプロセスを経て納得して自己決定していく。こんな医療にしていくべきでしょう」

カルテ開示は患者の主体性をうながす

最近話題の「カルテの開示」やインフォームド・コンセントについても、患者の権利を確立していこうという気運が高まっていることがうかがえる。

そもそもカルテとは何かを考えると、昔は医師個人のメモ的存在であったという。しかし、分業がすすんだ現在、個人的メモではなく医療チーム全員がある一定の患者に関する情報を共有する「患者に対するレポート」であるという発想の転換が必要だと、加藤氏は言う。

カルテを開示することは、患者にしてみれば、自分のデータをみて自分の健康に深く関わることでもある。つまり、いっさいお任せの患者像から脱皮して、主体的に自分の健康管理や医療に関心を寄せることである。

「薬一つでも、赤い錠剤と言っているのではなく、薬名から副作用、効能がわかって服用するほうが文化度は高いはずです。また、病気と闘う主体は患者で、医師という専門家の援助を受けながら、一緒に医療チームに参加していく。こんな意識が患者側に生まれることを願っています。『自分はただお医者さんに黙ってついていけばいい』という、思考停止をしていることは民主主義の担い手とはいえません」

これからの医療のあり方、患者のあり方を探り、かつ提言していく「医療の安全に関する研究会」に今後とも注目していきたい。

E S S A Y

感染と人間（3）

中田　光

写真1：1996年2月、かつての寄生虫研究部の同窓会で、田中寛先生（右）と筆者（左）

実験室に閉じこもった寄生虫学

　年号が昭和から平成へと代わった頃、私は東大医科研の寄生虫研究部に在籍して田中寛教授（写真1）の下で学位論文の仕上げに打ち込んでいた。田中先生はそのお名前のとおり寛大な方で、患者を診る傍ら肺のマクロファージの研究をしていた寄生虫門外漢の私を技官として採用してくださった。それまでの5年間は、病院で働いていたから、基礎医学のしかも寄生虫学に転身する私に周囲は驚いたけれども、どうしても打ち込んでみたいテーマがあって、このポストは渡りに船といったところだった。田中先生のご退官前だったので、臨時採用だったが、事実上、本格的な研究生活のスタートを切ることができたのである。

　寄生虫というと回虫やサナダ虫を連想する。何となく気持ちが悪く、暗いイメージがつきまとう。しかし、教室の雰囲気は自由で明るく、変り者が多かったが皆純粋でいい人たちだった。寄生虫学に疎かった私も周囲に支えられて、人生のうちで最も幸福な一時期を過ごさせてもらったような気がする。教授の田中先生は寄生虫疫学調査にコンピューターによる解析をいち早く取り入れ、先月号に書いたレイテ島など、日本や海外の研究フィールドで活躍した人である。しかし、私がポストに就いた頃の教室は、フィールドでの仕事を全て終えていて、免疫学や分子生物学の方向へと換わりつつある時期だった。

　全世界的にみれば、マラリアや住血吸虫症などの寄生虫病の猛威は決して去ったわけではなかったが、医学研究の方向自体が大きく変わってしまっていた。分子生物学や免疫学などにおける研究技術が長足の進歩を遂げるとともに、遺伝子や蛋白が容易に扱えるようになり、研究者の目は疾病そのものよりも物質に注がれるようになった。何をどう研究すれば、より病態の解明、治療の開発、患者の発見に繋がり、疾病の蔓延を防げるかという戦略的な側面よりも如何に早く物質を取るかという戦術的な側面が重視され、その結果、研究技術面で不利な医者が基礎医学研究からどんどん離れていき、基礎と臨床が益々乖離し、疫学などの地味な研究方法がいつしか廃れた。医科研も所をあげて癌遺伝子など新物質の発見に力を入れていた時期であった。

　寄生虫学も例外ではなかった。全国の大学医学部の寄生虫学教室が次々に廃止されていく中で、医科研寄生虫研究部もその存続をかけて方向転換せざるをえなかったのである。医科研に限ったことではないが、今から思えば、フィールドから離れて実験室に閉じこもり、寄生虫が単に研究の「材料」として扱われるようになっていったことは、この学問の持つ本来の特徴と魅力を失わせ、逆に衰退を招いたような気がしてならない。

彷徨える寄生虫－ニューモシスチス・カリニ

　しかし、一方ではこうした方向転換は畑違いの人に寄生虫学の門戸を開き、それがこの世界に幾つかの新発見をもたらしたのも事実であった。渡辺純一君（写真2）もその一人で、もともと呼吸器専門の臨床医だったが、ガンセンターで肺ガンの分子生物学を学んだ後、私よりも三年早く入所していた。大学の教養時代から二十年来の友人で実は田中先生に私を紹介してくれたのも彼だった。寄生虫に転向して彼はそれまでの経験を生かそうとカリニ肺炎の病原体であるニューモシスチス・カリニ（以下カリニ）を研究テーマに選んだ（写真3）。

　カリニ肺炎は白血病などの治療後に稀に起こることが知られていたが、注目されるようになったのはAIDSの日和見感染症として頻繁に見られるようになってからである。エリザベス・テーラーがこの肺炎の治療のために何度も入院を繰り返したことは有名である。しかし、病原体のカリニは培養ができないことから、研究が遅れていて今だにその正確な分類すら明らかでない。少し前の寄生虫の教科書では原虫（アメーバの仲間）の一種ということになっている。確かにその外観や薬剤に対する感受性はアメーバのそれに似ている。しかし、顕微鏡で観ても、アメーバのように活発に動かないし、その殖え方もどちらかというと真菌（かびの仲間）に近い。治療さえできれば分類などどうでもよいではないかと言う人もあるかもしれない。しかし、かびの仲間であるか、アメーバの仲間であるかによって効く可能性のある薬剤も違ってくるし、感染のし方も違うのである。

　そこで渡辺君は、増殖しているカリニが沢山持っている5SリボゾームRNAに目をつけた。5SリボゾームRNAはたった4種類の核酸が120個、数珠のように一直線につながってできているが、核酸の並び方（配列）は生物の種によって千差万別でしかもその種の中ではあまり違いがないから、カリニのRNA配列から原虫に近いか真菌に近いかを割り出そうと考えたのである。幸い、すでに彼はカリニ肺炎に感染したラットの肺をリンゲル液で洗って、ラットの細胞を除いてカリニを非常に純度よく取り出す方法を開発していた。こうして精製したほぼ純粋なカリニから、5SリボゾームRNAを抽出して、その遺伝子の配列を調べ、すでに知られていたかびやアメーバの遺伝子の配列と比較し、コンピューターを駆使して微生物の家系図である系統樹を書かせたのである。その結果は驚いたことにかびの一種とされている接合菌の遺伝子配列に最も近かった（図1に示した）。また、アメーバの一種であるアカントアメーバとかびの仲間である接合菌と粘菌とは非常に似た遺伝子配列を持ち、そのグループの中にカリニが含まれているようだった。従来の微生物種の分類というのは形態だけに頼りすぎていた。顕微鏡で観ると確かにカリニはグニャグニャと色々な形をしていてアメーバに近いと思ってしまう。しかし、形態だけから種を分類するのは、丁度クジラやイルカの形を観て魚の一種だと決め着けるようなものだ。こうして遺伝子や蛋白など物質レベルのアプローチができるようになってより客観的に微生物の分類が可能になったのである。丁度その頃、米国のエドマンらはリボゾームRNAのもう一つの成分である18SリボゾームRNAの遺伝子配列を調べ、渡辺君とほぼ同様の結果を得て科学雑誌「ネイチャー」に発表した。残念なことにタッチの差で先陣争いには敗れてしまったが、この仕事で渡辺君は寄生虫の世界に颯爽とデビューすることとなった。

中田　光 / なかた・こう
1954年、東京生まれ。東京大学農学部、京都大学医学部卒業。東芝中央病院内科勤務、米国ニューヨーク大学ベルビュー病院留学などを経て、現在、東京大学医科学研究所微生物株保存施設助手。

DNA診断をめざす

　次に何を研究しようかと渡辺君が思案している時に私が教室員に加わり、彼とカリニを研究

写真2：渡辺純一君

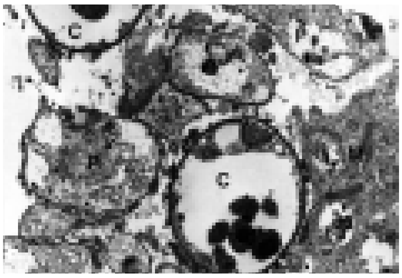


写真3：ラットに感染したニューモシスチス・カリニ
P：カリニ栄養体
C：カリニ嚢子
M：ラット肺胞マクロファージ

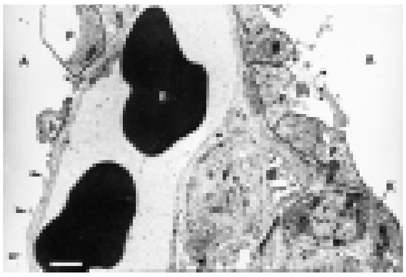


写真4：カリニ肺炎のラット肺電子顕微鏡像
A：肺胞腔
P：ニューモシスチス・カリニ
F：毛細血管内皮
K：膠原病線維
E：赤血球
矢印は肺胞上皮

することになった。この頃、医科研にもAIDSの患者さんが入院するようになり、一番多い合併症がカリニ肺炎だった。問題は診断だった。患者さんの肺のレントゲン写真はかなり症状が進行するまで陰が出ないので見逃してしまうことがしばしばある。というのはカリニは肺胞の表面にべったりとくっつき一層となって殖えるからで、肺の毛細血管に酸素が浸透するのを阻害して重症の呼吸困難を起こすので早く発見、診断して治療を開始しないと手遅れになってしまう（写真4）。喀痰からカリニを探しだすことが決め手だが、患者の多くはから咳で痰が出にくいうえ、よしんば出たとしても痰の中のカリニはお互いくっつきあって顕微鏡下ではゴミのように見え、見逃しやすい。

当時、DNA診断といって痰のなかの微量のカリニから遺伝子のDNAを取り出してサーマルサイクラーという装置でカリニに特異的な遺伝子だけを増幅するというPCR法が一番優れた診断というのが一般的だった。しかし、この欠点は逆に感度が良すぎて陰性の検体もしばしば偽陽性となってしまうことだ。特異性と感度（注）は常にPCR法につきまとうジレンマだ。ところが、渡辺君はカリニの遺伝子の中にある繰り返し配列をPCR法で増幅すれば、感度を落とさずに特異性を向上させられるのではないかと提案した。繰り返し配列というのはほとんどの生物の遺伝子が持っている構造で、数十〜数百の核酸からなる等しい配列が繰り返しひとつの遺伝子のなかに散らばっている。数百回も繰り返されることもある。私たちはラットの肺から精製したカリニの長いDNAをばらばらに切断し、いったん数百個の核酸からなる短いDNA断片にした後、遺伝子工学的な手法を用いて繰り返し配列を探した。

最初の実験は2ヵ月程かかったが、完膚無きまでの失敗だった。取れてきた繰り返し配列はカリニのそれではなく、ラットの遺伝子ばかりだった。その理由はこうである。カリニの細胞1個の遺伝子は約二千万個の核酸からできているが、ラットは約三十億個からなる。培養ができないためカリニはカリニ肺炎になったラットの肺から精製して取るが、渡辺君の方法を用いても細胞の純度は約99％である。つまり、カリニの細胞99個に対してラットの細胞が1個混ざっている。たった1個だが、これはDNAの量からすると60％以上がラット由来ということになる。この壁を乗り越えるために渡辺君はサブトラクション法という方法を試そうと言い出した。カリニの細胞純度99％にまで精製して得たDNAと感染していないラットの肺のDNAを比べて、前者に強く発現していて後者には見られないDNA断片をのみ探してくるという方法であった。

全滅したヌードラット

私たちはよいカリニの材料を大量に得るためにヌードラットの感染実験から始めなければならなかった。ヌードラットは生れつき免疫不全で、効率よくカリニ肺炎を起こさせることができるが、一匹3万円もする高価なものだ。週に二回、渡辺君と大学院生の佐藤君との三人でラットの世話と交配に追われた。こうして、ラットの糞尿とダニと異臭と闘いながら数か月かかって百匹以上に殖やすことができた。さあ、これから感染実験というある日、ヌードラットの皮膚は普通ピンク色をしているのが紫色となり、体は小刻みに震えていた。チアノーゼだ。後からわかったのだが、ある研究者が動物センターにセンダイウイルスを持ち込んだのだった。ウイルスの蔓延はたちどころに貴重なヌードラットを襲い、肺炎を起こして二週間とたたないうちに全滅させてしまった。

この時ほどショックだったことはない。渡辺君も私も暫らく黙して日々を過ごした。科学論文を読むとき、研究者の辛酸と苦難を行間に感じ取ることができるようになったのはこの時からだろうか？それでも、立直ってこの研究を始めて約一年で4つの繰り返し配列のDNAを取ることができた。渡辺君は早速ヒトのカリニ肺炎の診断に応用してみた。意外なことにラットのカリニ肺炎から取った繰り返し配列のDNAはヒトに感染するカリニには全く存在しなかった。つまり、ヒトとラットは形は同じでも遺伝的には全く違うカリニに感染するのである。その後、何人もの研究者がこのことを支持するような報告を発表し、現在ではヒトカリニとラットカリニは全く異なる種ということになっている。カリニはブタやイヌなど広く哺乳動物に感染する。それぞれの宿主によって感染するカリニも違うのだろうか？もしそうだとしたら、微生物の世界はなんと茫洋として奥が深いのだろう。診断に使えなかった悔しさを越えて私はただただ感慨深かった。

美女と寄生虫ー幻のエキノコッカス症

寄生虫時代でもう一つ忘れられない思い出がある。医科研の外来には時々、めったに見られない寄生虫の患者が訪れる。渡辺君と私は呼ばれて患者を診ることがあった。

その時の患者は某国立病院からの紹介で、エキノコッカス症の疑いということだった。患者の受診に先立って送られてきた肺のレントゲン写真は幾つかの円形陰影が葡萄の房のように連なっていて通常見られる結核や良性腫瘍の姿ではない。さらに、一つ一つの房には液体が溜ま

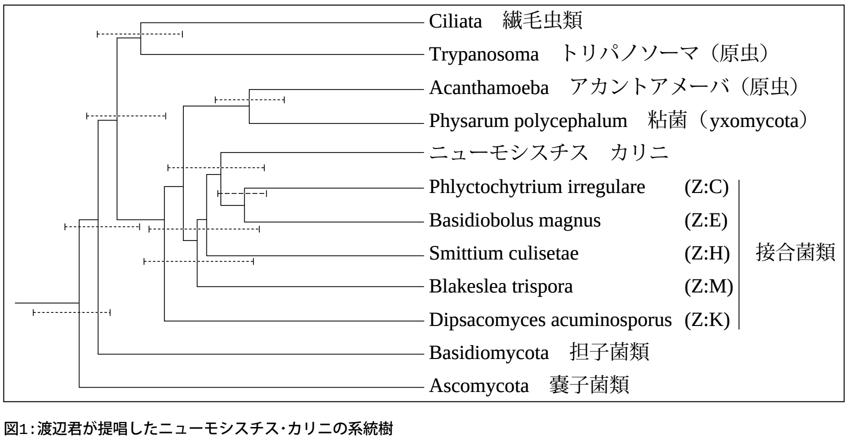


図1：渡辺君が提唱したニューモシスチス・カリニの系統樹

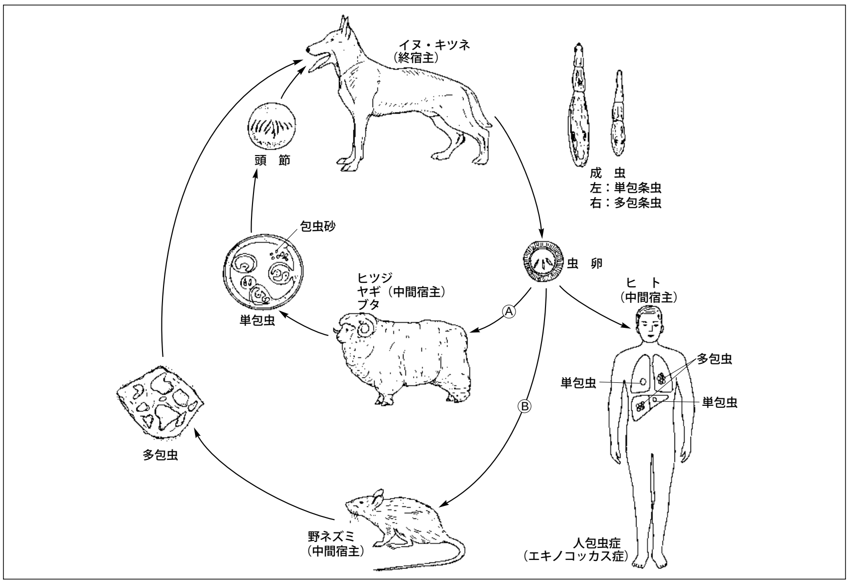


図2：エキノコッカスの生活史

っていて確かにエキノコッカス症を疑わせるものだった。エキノコッカスは北海道やオーストラリアに見られ、キツネやイヌを終宿主とする。ヒトにはこれらの糞中の虫卵を誤って摂取することにより感染する。小腸から侵入した幼虫は肺や肝臓に嚢胞をつくり次第に増殖し、時にガン顔負けの悪性度で脳など他の臓器に転移する（図2）。レントゲンを見ながら私は背中に寒いものを感じていた。

診察室にその患者が入ってきた時、私と渡辺君は思わず顔を見合わせてしまった。芳紀まさに十九歳。色白の大変な美人だった。よく聞くと患者はオーストラリアに数年間住んでいたことがあり、しかもペットのイヌを飼っていた。こんな美人があのえげつない寄生虫に感染しているとは！私は、エキノコッカスに嫉妬を感じ、この寄生虫が憎くなった。渡辺君と相談して、この疾患の根治のために外科手術を勧めることにした。レントゲンとカルテを持って懇意にしていた都立病院の外科を訪ねた。カンファレンスルームに会した外科の先生方の前でそのレントゲン写真をシャーカステンに挿しながら、「さあ、この疾患は何でしょう？」と渡辺君は言った。日本では北海道の一部にしか見られないこの病気を、いくら経験を積んだ先生方とはいえ、言い当てられるわけはない。満場がしーんとした頃を見計らって、渡辺君はエキノコッカス症の特徴、この病気の恐さ、手術の必要性を講釈し始めた。この時の渡辺君の得意な顔といったらなかった。胸部外科の世界で有名な先生方を前にほとんど独壇場の演説をやってのけたのだから無理もない。

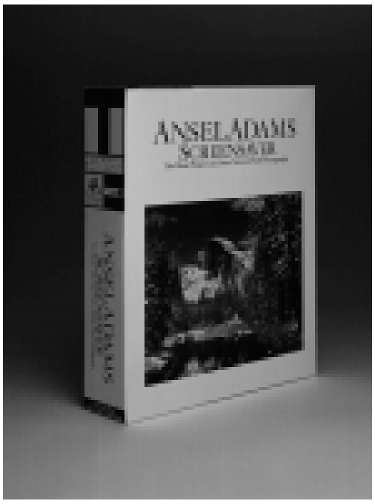
手術の日、憎きエキノコッカスをホルマリン漬けにして研究室に持ちかえるべく、その病院の病理検査室で待機していた。手術室から送られてきた肺区域切除標本を見て愕然としてしまった。取られた肺は確かに葡萄の房のようになっていて、液体が溜まっていたが、何処を探しても虫体らしきものは見つけられなかった。病理診断は気管支嚢胞症。先天性の疾患で気管支の一部が袋のようになっているために、感染が起こりやすく、肺炎を繰り返すため、手術が必要である。とんだ誤診だったが、渡辺君と私はひとまず、ホッとした。しかし、あれ以来、渡辺君はその都立病院の外科には足を向けていないという。

田中先生が退官されて、寄生虫研究部の人たちも次々に去っていった。私の任期も切れ、退職することになった日、残った教室員が送別会を開いてくれた。二次会、三次会とはしごして、2、3人になった時、突然ある先生が、「中田先生には本気で寄生虫学を勉強してもらいたかった」と言われた。その目は穏やかだったが、笑ってはいなかった。

私にはマクロファージの基礎研究に主力を注いで、寄生虫は余った力でやっていこうという腹積りがあったのである。和気あいあいとやっていたつもりでも、心の中は見抜かれていたのだった。

私こそ、寄生虫研究部の「寄生虫」であったのかもしれない。

（注）PCR法の特異性と感度
PCR法は非常に少量のDNAを100万倍以上に増幅することができる。反応にはTagポリメラーゼのほか、4種のヌクレオチド、目的とするDNAの両端20〜30塩基をコードする短いDNA断片であるプライマー2本が必要である。非常に感度がよい反面、目的とするDNA以外のDNAを感知して増幅してしまう場合もある。このため反応の特異性を維持するためには感度をある程度下げなければならない。



アンセル・アダムスの作品がスクリーンを守ります

スクリーンセイバーは、パソコンモニターに同じ画面が長時間表示されることによる焼き付きを防ぐためのソフトウェアです。一定時間操作が行われないと、モニター上でアンセル・アダムスの作品によるスライドショーが展開されます。スライドは彼が生涯撮り続けた、アメリカの国立公園などの美しい自然の風景写真の中から、30点が厳選され、構成されています。

システム条件
↓
Macintosh 版 :
System 7.0 / 68020 / 6.1MB（HD容量）以上
↓
Windows 版 :
Windows 3.1 / 486SX / 3.8MB（HD容量）以上

＊Macintosh 版, Windows 版ともにCD-ROMドライブが必要です。

お問い合わせ :
フォト・ギャラリー・インターナショナル
〒105 東京都港区虎ノ門 2-5-18
telephone 03 3501 9123

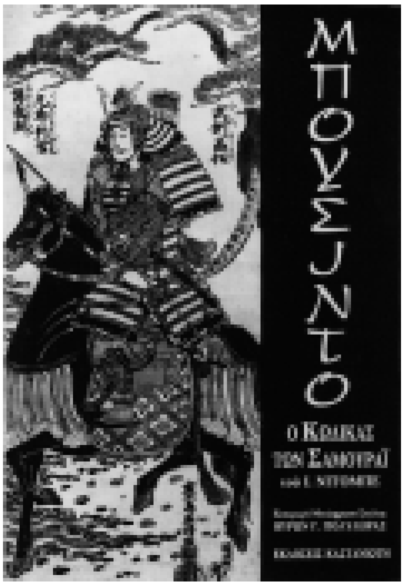
PHOTO GALLERY INTERNATIONAL

＊抽選により10名様に「アンセル・アダムス スクリーンセイバー」を差し上げます。ご希望の方は、添付ハガキでお申し込みください。

T O P I C

『武士道』ギリシア語版刊行さる

新渡戸稲造 著 / ヴィロン・ポリドラス 訳



『武士道』ギリシア語版

「武士道はその表徴たる桜花と同じく、日本の土地に固有の花である。それは古代の徳が乾からびた標本となって、我が国の歴史の腊葉中に保存せられているのではない。それは今なお我々の間における力と美との活ける対象である」－の書き出しで有名な『武士道－日本の魂－日本思想の解明』(1899)は、新渡戸稲造が38歳の時に米国フィラデルフィアにて出版された。

その目的は欧米の人びとに日本人の道徳観のあり処を伝えることにあった。ゆえに原書は荘重なる英語で書かれた。序にいわく「私は、私の正邪善悪の観念を形成している各種の要素の分析を始めてから、これらの観念を私の鼻腔に吹きこんだものは武士道であることをようやく見いだしたのである」と。

翌年日本語訳が出版され、約5年間に10版を重ねる。一方海外ではニューヨークとロンドンでの同時発行に続き、独語、ボヘミヤ語、ポーランド語、ノルウェー語、露語、仏語、中国語などに翻訳された。

けれども、今や日本人の大部分を占める戦後生まれの人びとにとって「武士道」とは、いかにも古くさく、封建時代の遺物のように思われるのではないだろうか。それが、21世紀を目前に控えた1995年、遠くギリシアの地で、48歳の現役政治家によって翻訳出版され、すでに5版を重ねているという。少なからぬ驚きである。

「日本の魂」への共感

訳者のヴィロン・ポリドラス(Vyron Polydoras)氏は、1947年、ギリシアのオリンピア生まれ。アテネ大学で法律を学び、米国の大学で政治学の博士号取得。現在はギリシア政府のスポークスマンであり、最大野党・新民主主義党の国会議員である。1993年には外務次官として来日し、小和田外務次官と会談している。

ポリドラス氏は大学院時代、日本人の友人を2人得た。彼らより得た日本に関する知識は、カミカゼ、広島と長崎（被爆）、皇居前の集団自決（ハラキリ）、黒沢映画の『七人の侍』。後に、日本に息長く続く儒教思想、鎖国、日清日露戦争、真珠湾、無条件降伏と天皇の人間宣言、戦後の驚異的な経済発展などであり、それらの中に「サムライの厳粛さと自己修養のイメージ」を感じたという。

日本のサムライに興味をもった氏は、関連書物を殆んど読破したが、当初は、自国ギリシアの文化や広義の西欧文明とは対局にあるものと考えていた。

やがて武士道の源流のひとつである儒家の孔子は、ギリシア哲学の祖・ソクラテスと同時代人であること、ソクラテスが「自由を、然らずんば、死を」と叫んで自ら毒杯を仰いだ史実や、アイアスの悲劇（＊）などに、共通項を見いだす。三島由紀夫の自衛隊襲撃割腹事件（1970）に関しても、ギリシアにおいて同様の自決事件（＊＊）があったことを思う。両者は地理的にも歴史的にも差異をもちながら、失われた伝統的戒律への服従という点においてつながっていると見たのである。

このように「日本の魂への共感を発酵させ」ていたポリドラス氏と、新渡戸稲造著『武士道－日本の魂』との出会いは、95年初頭のことであった。「初めて読んで驚いた。それ自体が啓示だった。新渡戸は明快で簡潔な方法で私の疑問に答えてくれたと感じた」のである。

新渡戸が目指したもの

新渡戸稲造は自身がクリスチャンで、クェーカー教徒の米国人妻をもつ。彼は外交官として、第一次世界大戦後の平和会議の日本代表や国際連盟の次官もつとめ、「日本と西欧との懸け橋」になることを生涯の目的としていた。

『ミカドの肖像』で、日本についての最初の系統的な紹介者になった、W･E･グリフィスは『武士道』の緒言の中で、「新渡戸博士は達筆を揮って描き、一千年の日本文学が輝かしくも反映しているところの絵画の色彩を再現した。（略）その同胞たる幾百万の高潔な人びとの踏みし途を飾りたる精華をば巧妙に記述しているのである」「武士道についてのこの小著作は、この世紀の最大問題、すなわち東洋と西洋との調和と一致の解決に対する著しき寄与である」と述べている。

しかし、ポリドラス氏が真に驚いたことは、新渡戸が西欧思想を深く正しく理解し、その真髄を取り出して、武士道のそれと比較し符号させていることであった。例えば、武士道の「勇・敢為堅忍の精神」を定義して「勇とは義しき事をなすことなり」（『論語』より）と述べた後、「危険を冒し一命を殆くする猪突的行為はシェイクスピアが“勇気の私生児”と言えるもの」「勇気とは恐るべきものと恐るべからざるものとを識別することなり（プラトン）」、更に水戸の義公の「戦場に駆け入りて討ち死にするはいとやすき業にていかなる無下の者にてもなしえらるべし。生くべき時は生き死すべき時にのみ死するを真の勇とはいうなり」をあげるというように。

氏は「幾千年という歴史の実験室の中で、戦争、平和、啓蒙と暗黒時代は繰り返されているが、自由と正義、誠実、勇気と寛容、義務や恥の感覚、愛国心、忠誠心、そして名誉心などは、どんな民族や社会、時代においても、“自動的に”存在したことは決してない。ただ試され証しされるだけなのである。『武士道』はそのことを思いおこさせる」と語っている。

我われは何ものか

『武士道－日本の魂』に散りばめられている名言を読んで、恐らく多くの日本人は（団塊ジュニアでさえ？）懐かしさと哀歓を覚えるだろう。ちょうど散りゆく桜花を眺めるように。

21世紀を目前にして、道徳観、倫理観の混乱は深まる一方である。100年前に熱烈に求められた「東洋と西洋との調和」はどのようになされたか。結果として一方的な支配と混迷を生んではいないか。

我々は何ものなのか、そして何処に行こうとしているのか。このことを考えるとき、諸外国の智慧を学ぶことと同時に、我われ自身の姿をよく吟味してみることも必要なことだ。西欧思想源の地ギリシアでなされた労作に敬意を表したい。

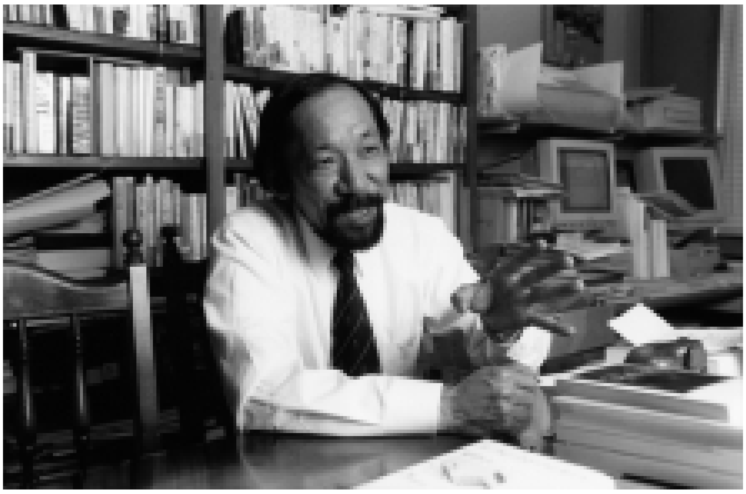
『武士道』緒言にいわく、「比較こそ学問と教養の生命ではないか。言語、道徳、宗教、礼儀作法の研究において、『一つしか知らぬ者は一つをも知らぬ』と言われるのは真理ではないか」。

＊
ソフォクレスの悲劇三部作の一つ。トロイ戦争の英雄アイアスは、アキレスの鎧をオデッセウスと争って失敗し、恥辱のために自殺した。

＊＊
1910年、ペリクレス・ヤノポロスは芸術表現のギリシア系統を復活させることができず馬上で自決した。

遺伝子と病気と人間

樽井　正義



樽井　正義 / たるい・まさよし
1947年、東京生まれ。70年、慶應義塾大学文学部卒業。現在慶應義塾大学文学部教授。著書（共編著）に、『カントー現代哲学としての批判哲学』（情況出版 1994）、『社会哲学の領野』（晃洋書房 1995）、『カントと生命倫理』（晃洋書房 1996）など。

いま、ヒト・ゲノム解析が世界規模の共同研究として進められている。ヒトの遺伝子の集合であるヒト・ゲノムは、地球上に最初の生命が誕生してから35億年におよぶ長い進化の歴史の産物であり、ヒトは過去、現在、そして未来に生きるすべての生物と、多寡の程度の差はあれ遺伝子を共有している。つまりヒト・ゲノムは、ヒトと他の生物との共通性を示すとともに、ヒトという種の独自性をつくりだしている。そしてまたヒト・ゲノムは、ヒトという種のすべての成員に基本的には共有されているとともに、各遺伝子のタイプの多様性によって成員の個性をつくりだしてもいる。その個性には、髪や皮膚の色、体型や顔つきとともに、形態や生理の先天的な病気として現れるものも含まれている。

ヒト・ゲノムの解析とその臨床医学への応用、つまり病因遺伝子の診断とその治療には、相応の意義が認められる。しかしその推進に際しては、それに伴うさまざまな倫理上の問題に配慮する必要が指摘されており、文部省の科学研究費によるヒト・ゲノム解析研究においても、これまたその多寡はともあれ、研究費の1%が「ELSI」と略称される倫理・法・社会問題の研究に充てられている。それを検討する生命倫理学の領域では、ヒト・ゲノムという未知の領域の知識を得ることが「神を演じる」ことにつながりはしないかという漠とした危惧から、病因遺伝子の診断と告知、その個人情報のプライバシー保護やそれにもとづく差別の防止、遺伝子治療技術における安全性の確保などの具体的な懸案にいたるまで、これまでこの領域で議論が重ねられてきた問題群のすべてが、改めて問い返されている。ここではそうした問題に連なるものとして、ヒト・ゲノム解析という人間について知る作業と、遺伝子治療という病気をなくす作業とに対して、ときとして表明される過度の期待を批判することを試みたい。

遺伝子の解明で人間がわかるか

ヒト・ゲノムを解析することによって、人間とは何かという問にどこまで答えることができるのだろうか。生物の個体としてのヒトは、細胞とその生産物である分子によって構成され、細胞は分子からなり、分子は原子からできている。長い間およそ存在するものの最小単位で、これ以上分割できないものとされてきた原子は、現代の物理学ではさらにより小さい素粒子や基本粒子からなるとされている。あるレベルのもの、たとえば細胞が何であるかを知るには、それを構成するレベルにあるもの、この場合は分子について知ることが不可欠である。しかし、分子についての知識だけでは細胞は理解できない。原子と分子、細胞と個体も同じ関係にある。あるレベルのものは、その下のレベルのものの単に量的に複雑な構成に還元することのできない新しい質をもっており、だからこそ別のレベルとされるのである。ピエール・テイヤール=ド=シャルダンは古生物学の研究を下敷きにして、これを複雑性-進化の原理と呼んでいる。

遺伝子という分子は、その上のレベルである細胞の構成要素であるにとどまらず、さらにその上のレベルである個体としての生物の形態や生理の設計図という特殊な役割を担っている。したがってヒトの遺伝子を対象とする分子生物学は、ヒトについて多くのことを解明してくれると期待される。しかしヒトの場合、遺伝子はいわゆる神経質とか粘液質とかいうような個体の性質あるいは行動までは教えてくれない。

ヒトをコンピューターにたとえるなら、個体の形態や組織や生理はいわばそのハード・ウェアであり、遺伝子はそれを先天的に設計している。しかし知覚や運動、さらには思考の能力といったハード・ウェアの性質は、準備された感覚器官や筋肉や大脳などだけで決まるのではなく、むしろそれを後天的に環境との関わりのなかでどのように使い鍛えるかによっている。ハード・ウェアのうえで動くソフト・ウェアとしての知覚や運動や思考、つまり広い意味での行動についていえば、動物は一般に本能という先天的なプログラムによって規定されている。本能は遺伝子が提供する情報である。しかしヒトは、アーノルト・ゲーレンが哲学的人間学の観点から指摘するように、本能を欠いた欠陥動物である。ヒトの行動を規定しているのは本能ではなく、その個体が属する共同体から後天的に与えられる文化である。ヒトも他の動物と同様に、遺伝子が設計した生理によって食欲や性欲をもつが、それを満足させる術を教えてくれるのは本能ではなく文化である。

したがって、いわゆる自由意志に関する哲学の議論を引き合いに出すまでもなく、遺伝子からヒトの性質や行動を知ることは期待できない。怠惰や犯罪を導く遺伝子はない。そして、ないはずの遺伝子にもとづいてレッテル付けと差別が行われてはならない。これに関連して、「神を演じる」という言葉に込められた漠とした危惧のなかに意味のあるものを探るならば、わかるはずもないのにわかったつもりになって振る舞うことへの危惧を、その一つに挙げてもよいだろう。この危惧は、血液型という分子レベルと個人の性質とを無媒介に短絡させる、もとはと言えばナチスの御用学者による優生学の単なる思いつきが、みじんも疑われずに無邪気に信じ込まれているのを見ると、あながち杞憂とは言えないように思われてくる。

遺伝子診断と治療で遺伝性疾患はなくせるか

遺伝子治療という名の下に現在試みられている方法によって、さらには治療対象を体細胞に限定し、生殖細胞へは不可侵という現在のガイドラインの下で、はたして遺伝性疾患の治療は可能なのかが、まず問われるべきだろうが、ここでは触れない。ヒト・ゲノムの解明が進み、病因となる遺伝子が特定されて、その有無を早期に診断する技術と、病因遺伝子を正常な遺伝子と置き換える技術とが開発されれば、その病気の発症予防および治療は原理的に可能になる。そうなったとして、遺伝性疾患はどこまでなくすことができるのだろうか。

結論から言えば、減らすことはできてもなくすことはできない。常染色体優性遺伝疾患は736、おなじく劣性遺伝疾患は521、X連鎖伴性劣性遺伝疾患は107、つまり単一遺伝子が病因になるものだけでも1374疾患にのぼると言われている。これに多因子による遺伝疾患と遺伝因子と環境因子の相互作用による疾患とを加えれば、さらに何倍かになる。このすべてについて病因遺伝子の有無を早期に検査し、発症を未然に防ぐことは事実上不可能である。現実には親が優性遺伝疾患を発症している場合や劣性遺伝疾患の保因者であることがわかっている場合に、その子の検査が行われるが、それを徹底したところで、突然変異による病因遺伝子の発生を防ぐことはできない。また劣性遺伝疾患の保因者であることは、その子が発症して初めてわかることも多く、遺伝子診断の対象とされるのは第二子以降である。

現在7つの先天性代謝異常について、その早期治療を目的に新生児スクリーニングが行われている。遺伝子診断と治療の技術開発により、さらに多くの疾患について同様のことが行われるのは、もちろん望ましいし可能だろう。しかし、遺伝疾患は減らせてもなくならないということを直視し、過度の楽観は慎まなくてはならない。遺伝性疾患はどれも、その発生頻度は低い。そのほとんどが100万人に1人から1万人に1人というオーダーである。それでも劣性遺伝疾患の場合、その保因者は、発生率の平方根の1000人に1人から100人に1人いることになる。そうした疾患がさきに示した数ほどあるのだから、誰もが病因遺伝子を数個はもっている計算になる。同じ病因遺伝子を両親のそれぞれから受け継いで発症するのはまさに偶然だが、そうでないのもまた偶然にすぎない。つまり私たちは誰も遺伝性疾患と無関係でいることはできない。

そもそも人間は生きているかぎり病気と無縁ではない。私たちの社会では後天的な急性疾患の多くがかなりの程度克服されているが、その結果手に入れた長寿の後半は、成人病という慢性疾患とつき合わざるをえない。社会から先天性であれ後天性であれ病気や障害をもつ人がいなくなることはけっしてない。したがって病気の人がいる社会がただちに不健全であるのではない。病気とともに生きる人にとって生きにくい社会が不健全なのであり、当たり前に暮らしていける社会は健全なのである。健康は言うまでもなく望ましい。しかしそれを強調する余り、健康でなければまともな人間ではないかのように思われてはいないだろうか。要職にある人はジョギングの一つもして見せなくてはならない社会では、そうではないと言い切れないだろう。

病気とともに生きる、病気の人とともに社会をつくることは、医学医療にとって、そして生命倫理学にとって、病気をへらすこととならんで大切な課題である。遺伝子診断と治療の技術開発を進めるとともに、欧州評議会が勧告している「遺伝的介入を受けずに生まれてくる権利」、つまり先天的な病気や障害をもって生まれ生きる権利を宣言し擁護することが求められている。　（写真：永田忠彦）

FAITH

禅とキリスト教（1）

ある挑み—自然消滅—

奥村　一郎

奥村　一郎 / おくむら・いちろう
1923年生まれ。東京大学法学部政治学科卒業。48年、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会･カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。著書に、『断想』『主とともに』『友の祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンス宗教研究所）など多数。

だいぶ前のことだが、朝日新聞にのせられた、ナショナル・松下電器産業株式会社の創始者・故松下幸之助氏のつぎのような文章があった。《寿命を知る》という題であった。

「過日、京都の真々庵で、あるお坊さんと歓談のひとときを過ごした。そこでいろいろと話をかわしたのだが、その話のなかで、フト私はこの坊さんに、禅宗の今後はいったいどうなっていくのか、ということをたずねてみたのであった。

　禅宗だけに限らず、わが国の仏教というものは、現在、必ずしも興隆しているとはいえないように思う。最近欧米諸国で、内容はともかく、禅ということばに興味が持たれるようになったとはいうものの、全体の趨勢としては、ますます盛んであるとは決して言えないように思うのである。

　そこで私は、禅宗のお坊さん自らが、これをどう考えておられるのか、なにげなしにおたずねしてみたのであった。

　答はまことに簡単であった。

『禅宗は自然消滅でしょうナ』

　正直なところ、私はおどろいた。ともかく、このお坊さんは高僧といわれるほどの偉い方なのだが、そのお坊さんが、自らここまで言い切られるとは、私は考えてもみなかったのである」。

　一応、ここで文を切ってみよう。

「禅宗は自然消滅でしょうナ」・・・・。

　いやしくも自ら信奉する宗教について、「自然消滅」と言い切ってしまうことには、さすがの松下氏も、度胆を抜かれたにちがいない。

　そこでそのあとに松下氏は、禅僧の説明と自分なりの理解を書き留めている。

「私のおどろきを察しられたのか、その人は静かにことばを足された。『松下さん、それは寿命ですよ。諸行無常を説かれた釈迦の教えなんですよ』。

　私は〝なるほど〟と思った。いっさいのものが生々流転し、いっさいのものに寿命がある。大きな目で見れば、そこに真の生成発展の姿があるわけである。だから禅宗といえどもその例外ではない。万物流転の法則に従って、やがては寿命がつきてゆくのである。お迦さんが仏教のなかで自らそうお教えになっている。

——なるほど言われてみれば、まったくそのとおりではないか。

　しかもこのお坊さんご自身は、自分の信奉する禅宗が、やがては自然消滅するからといって、けっして悲観しておられるわけではない。むしろそれを動かしがたい一つの哲理として承認されたうえで、何ものにもとらわれることなく、禅宗の寿命のつきるその瞬間まで禅の教えを説いてゆこう、と考えておられるように思う。そして、そこにいわば非常な安心の境地を得ておられる、ということなのであろう。

　私はこれを聞いて非常に啓発されたのであった。結局われわれ人間の寿命も、また仕事や事業も、これと同じことがいえるのではないかと思う」。

　わたしは、この小文を目にしたとき、ほとんど反射的に、自分自身にあてはめて考えてみようとした。

　もし仮に、わたしがあのような質問をうけたとしたら、どう答えていたであろうかということである。

　戦後十年たらずで、今日に至るまで頭打ちになっている、日本におけるキリスト教のまことに遅々たる歩みなどを考えて、「キリスト教の今後の見通しは・・・・」と人に尋ねられた場合、はたして「キリスト教は自然消滅でしょうナ」と答え得たであろうかということである。

　おそらく、否。いや確かに否である。

「キリスト教は永遠、絶対であり、他宗教はなくなっても、キリスト教は世の終わりまでつづく」というようなことを力説したことであろう。これは、わたしだけではあるまい。少なくとも、キリスト教徒をもって自認しているものなら、よし、司祭や、修道者、牧師

でなくとも、同様のことを断言するにちがいない。もし「キリスト教は自然消滅でしょうナ」などと言おうものなら、たちまち、不信の徒として四方八方からきびしく糾弾されることは明らかである。

　ということは、キリスト教徒であるわたしとの対談であったなら、松下氏は決してあのように啓発されることはなかったであろうということにもなる。と考えると、禅仏教のもつ体質と、キリスト教のそれとには、どうしようもない異質性があるといわなくてはならない。いっそのこと、松下氏をおどろかし、啓発するために、あの禅僧をまねて、「キリスト教は自然消滅でしょうナ」と悟り顔でいおうものなら相手の心理効果を狙う自己欺瞞となることも必定。つまり、キリスト教徒の口からは、あのような禅僧のことばは、どうしても出ようがないということである。一体、これは何を意味しているのであろうか。ことばは、何でもないひと言、「自然消滅」というだけのことである。しかし、そのことを言い得るか否かは、きわめて深い宗教の本質的問題がひそんでいる。

　もし、キリスト者が、そのような心境に到達することができないというのなら、その理由はどこにあるのだろうか。キリストの永遠性に基づくキリスト教とその教会の不朽性を認め、かつ信じることは真理に対する誠実さであって、それを否定することは、偽りの謙遜であると主張すること自体が、われわれキリスト者自身の宗我や我執からの脱出を阻んでいるということになるのであろうか。

　謙虚と真理とは切り離せないと同時に、双方ともに、自我からの解放をもたらすという大原則がここでも再確認されなければならない。謙遜は自分を守るのではなく、真理を守るために自我を捨てることを知っているからである。

　キリストの偉大さ故に、キリスト者は、深層の至純な脱自我の境地に達し得ない背理がそこにあるというのは、いったいどういうことなのであろうか。

　キリスト教的霊性に対する、禅のみごとな挑みが、そこにあるとするならば、数千年の伝統に生きる、深い東洋の霊性を前にして、いまキリスト教は、大いなる世紀の課題に直面しているといわなくてはなるまい。

《付記》本誌”Vitalité”に前号まで執筆してこられた秋月龍珉老師とは「禅とキリスト教」のさまざまの会合でお目にかかり昵懇にさせていただいてきた。ご老師は青年時代に、キリスト教から禅仏教に変わられたと聞いている。小生は逆に東大在学中、禅仏教からキリスト教に転向した。仏縁というのか神の摂理というのか、長い仏教の伝統が今なお生きている日本ならではの奇遇の場を本誌において与えられたことに心から感謝したい。

■ フォト・ギャラリー・インターナショナル

Lin Tian Fu 林添福

"Images of Frontier, China"

台湾の写真家による中国少数民族のドキュメント

7.3 (Wed.)～8.16 (Fri.), 1996

東京都港区虎ノ門 2-5-18 〒105 TEL. 03 3501 9123
月～金 11:00-19:00 土・日・祝日休館

■ P.G.I 芝浦

目羅勝 Masaru Mera

"アメリカ"

ライフワークとしての「心のアメリカ」の風景

7.9 (Tue.)～8.10 (Sat.), 1996

東京都港区芝浦4-12-32 〒108 TEL. 03 3455 7827
月～土 11:00-18:00 第2・第4土・日・祝日 休館

PGI
PHOTO GALLERY INTERNATIONAL

ブルゴーニュゆかりの人々

人類愛と芸術に生きた ロマン・ロラン（Ⅰ）

島野　盛郎

ブルゴーニュを愛した作家たち（3）

ロマン・ロラン

ロマン・ロラン（Romain Rolland）の名は日本人にも広く親しまれている。『ジャン・クリストフ』（1904〜12）、『魅せられたる魂』（1922〜33）の二大長編小説をはじめ、そのほとんどの作品が、早くから日本で翻訳され、読者に大きな感銘を与え続けているからである。

ロマン・ロランはフランスを代表するというより、世界的な作家であり、その国際主義と民衆愛と反戦思想を盛った作品の数々は、いまも世界中の人びとに共鳴され続けてやまない。

このロマン・ロランはブルゴーニュ出身である。1866年１月29日、ブルゴーニュ地方の北東の小さな町・クラムシーに生まれ、1944年の暮、同じブルゴーニュ地方の中世の教会と丘の町ヴェズレーで死んだ。

その78年の生涯は、大きな人類愛の精神と音楽に培われた芸術的な魂で貫かれている。これから２回にわたってロマン・ロランの偉大な魂に触れてみることにしたい・・・・。

トルストイの言葉に感動

ロマン・ロランの生家は、数世紀来、ブルゴーニュの地に住みついた旧家で、代々公証人をつとめ、父は五代目の公証人であった。母もこの地方の名家の出で、カトリックの信仰に厚く、やさしい人柄で音楽に対してすぐれた理解力を持つ女性であった。幼い頃のロランの何よりの喜びは、母が弾いてくれ、ときには手を取って教えてくれたピアノと、家の近くの聖マルタン寺院が鳴らす鐘の音であった。

故郷のクラムシーで初等教育を終えたロランはパリに出、ルイ・ル・グラン中学に学んだ。中学を卒業すると最高学府である高等師範学校を受験、２度失敗したのち、1886年宿願かなって合格した。以来３年間の学生生活は、学問、読書、交友などにより、ロランを大きく成長させる。

なかでも深く影響を受けたのは、トルストイの作品であった。ロランは感激の余りトルストイに２度にわたって手紙を出した。その返事には「芸術家としての真の条件は、芸術に対する愛でなくて、人類に対する愛である」という言葉があり、感動した。その教えはロランの将来の決定的な指針となった。

1889年、同校を卒業。歴史学の教授資格をとり、さらに留学生に選ばれて、ローマに滞在した。ローマでは革命的な思想を抱いているため祖国ドイツを追われた老婦人、マルヴィタ･フォン･マイゼンブークと親交を結んだ。彼女はワグナーやニーチェの友人であり、ドイツの偉大な芸術家、ゲーテやベートーベンのことをロランに教えた。彼女の暖かい友情に包まれて、ロランは理想主義的なドイツの心を学んだ。のちに『ベートーベンの生涯』（1903）を中心とする音楽家の伝記研究や音楽批評は彼女の影響からスタートしたものである。ロランは、このローマ滞在中に『ジャン・クリストフ』の構想が、おぼろげながら浮かんでくる。それは日暮れ時、ジャニコロの丘から見渡した風景が、いかにも調和にみちているので、分裂したヨーロッパ諸国民も、この風景のように融合することができないものかと感じたことがそもそものきっかけとなったからである。

ローマ留学を終え、パリに戻ったロランは母校高等師範学校の教授として歴史学の講座を担当、ついでソルボンヌ大学の音楽史の講座も受けもった。1895年には『近代抒情劇の起源』で文学博士の学位もとる。同時に数多くの戯曲や小説や伝記の力作を発表し、その文学的地位を着々と固めていく。だが、家庭生活は不幸であった。1892年、言語学教授の娘、クロチルドと結婚したが、孤独癖の強いロランと社交好きの妻との間はしっくりいかず、ついに1901年、離婚するのである。

『ジャン・クリストフ』は離婚の２年後、1903年７月に筆を起こし、1912年６月に書き上げられている。その間、10年の歳月が経過しているが、その10年はロランにとって孤独と苦悩の生活の連続であった。妻と別れてモンパルナスのわびしい住居に移った彼は大学教授としての職務や研究その他の雑事に忙殺されながら、『ジャン・クリストフ』を書き上げることを唯一の生き甲斐として日々を過ごした。

その甲斐あって『ジャン・クリストフ』は画期的なすばらしい作品となった。いわゆる大河小説の先駆をなし、フランス文学史上、きわめてまれな理想主義的な作品としての金字塔を樹立したのである。

『ジャン・クリストフ』でノーベル文学賞

『ジャン・クリストフ』（全10巻）は、全作が交壮年期のクリストフのパリにおける生活とその環境、（3）主人公の生涯の完成期､がそれである。

ジャン.･クリストフ・クラフトはドイツのライン河畔の小都市に生まれ、少年時代から生活の試練を受け、青年時代にパリに出、音楽家となり、いろいろの苦労をする。その性格や育った環境はベートーベンに似ている。しかし、ベートーベン的ではあるが、20世紀前半の時代を生き抜く自主的存在として描かれている点がちがっている。この力強い創作力と豊かな人間性をもつドイツ人クリストフはフランス人オリヴィエと親友になる。そして本当のフランス精神を理解することによって思想と仕事を成熟させる。晩年イタリアにゆき、女友達グラチアとの友情を通してイタリアの調和の美を体験する。こうして彼の精神と仕事とは、力と理性と調和との総合を実現することになる。それは全ヨーロッパの協調という作者の理想の姿であった。

〈あけぼの〉、〈朝〉、〈青春〉と続く10巻のこの物語には全篇に音楽的リズムが川のようにながれている。そして最後に、〈生に栄あれ！死に栄あれ！〉という賛歌となって魂の大洋の中に流れこむのである。

現代フランス文学の権威で、早大名誉教授・新庄嘉章は、こう評論している。

「この作品は一つの魂の生成発展の物語であるが、同時に鋭い文明批評を含んだ大規模な社会小説でもあり、また、ヨーロッパ各国の精神力を糾合し調和させて、一種のヨーロッパ共和国を築きたいと夢みていた、ロランの理想を盛った作品でもある。第一次世界大戦の脅威がひしひしと迫ってくる重苦しい前夜に、クリストフはドイツとフランス両国民の和合を力説した。だが現実には、両国はついに不幸にも戦いをまじえ、相互に文明破壊の惨禍をもたらした。しかしロランのこの悲痛な叫びは、フランスとドイツの、いや世界各国の良心ある人びとの胸に深い余韻を残したことは否みがたい事実である」

『ジャン・クリストフ』は「文章によって描かれたすぐれた音楽小説」との評価を受け、1913年にアカデミー大賞を1915年にノーベル文学賞を受賞した。

1914年７月に第一次世界大戦がはじまると、フランスではドイツに対する憎悪の感情が昂まり、熱烈な愛国主義の風潮が支配した。しかし、ロランは絶対平和主義の立場から戦争に反対し続けた。そのため一部のフランス国民から親独的であると非難され、中立国のスイスへ亡命せざるを得なくなった。スイスでのロランはあくまで自分の信念を忠実に守り平和主義をつらぬいた。ノーベル文学賞を授与されると、その賞金全部を赤十字社と社会事業団に寄付した。

そして戦争反対の文章を発表し続けた。「狂気にとらえられた人びとの中で生き、文明の破滅に立ち会って、しかも無力であるということは恐るべきことである。このヨーロッパ戦争は最も由々しい、歴史の破局であり、人類の友愛によせるわれわれの希望の瓦解(がかい)である」といった調子が一貫して流れている。

これら戦争反対を主張した文章は『騒乱を超えて』（1915）、『先駆者たち』（1919）などに収められている。

第一次世界大戦後は以前にまして社会問題に強い関心を持つようになった。1921年、フランスに戻っていたロランは、再びスイスに行く。そして静かなレマン湖畔の山荘で瞑想生活に入った。この頃のロランはインドのガンジーの思想に強くひかれた。インド民衆の独立運動を指導しているこの無抵抗主義者の中に、ロランは個人の精神の偉大さを見いだしたのであった。

やがてロラン第二の長編『魅せられたる魂』（1922〜33）の執筆にとりかかった。

『魅せられたる魂』は女主人公アンネット・リヴィエールの良心的な魂の血みどろな苦闘史である。アンネットはあくまで自我の自由を失うまいとして安易な幸福を拒否し、多難な人生に飛び込んでゆく。そして幾多の人生経験から、自我愛から母性愛へ、さらに自我的な母性愛は人類的な大きな母性愛へと拡大してゆくのである。物語の前半ではアンネットは恋愛や生活のために苦闘する女性として描かれ、後半では、反ファシズムの闘争に身を投じた愛児を見守る悩める母として描かれている。1926年頃から国際的ファシズムが台頭するようになって、ロランの思想もしだいに変わってきた。それまではガンジーの非暴力の立場を支持し、ソ連の戦闘的共産主義に批判的であったが、反ファシズム運動のためには、それをも認めるようになってきた。その思想の変化が『魅せられたる魂』の中にはっきりと現われている。

この小説が完成するまでの時期はロランにとって最も試練に満ちていた。すなわち、この小説にはインドの無抵抗主義とソ連の革命主義との調和を見出そうとするロランの思想的遍歴の苦悩が形象化されているからである。

ともあれ、『ジャン・クリストフ』と『魅せられたる魂』によって、ロランは永遠に世界中の人びとから愛される作家となったのである。

（つづく）

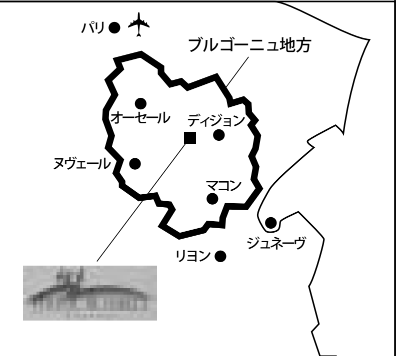
ロランの生家

島野 盛郎 / しまの・もりお
1932年生まれ。早稲田大学第一文学部仏文科卒業。54年、ダイヤモンド社入社。雑誌記者、出版局デスク等を勤め、現在、フリーライター。「伝記研究会」幹事。主な著書に『夢の中に君がいる一越路吹雪物語』（白水社）、『食を創造した男たち』（ダイヤモンド社）などがある。

Château de Chailly / シャトー・ドゥ・シャイイ

ブルゴーニュへようこそ。

中世がいまだに息づいているブルゴーニュにいらっしゃいませんか？数々の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、中世そのままの街並、美しく広がる大地や、小さな村々、豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、それがブルゴーニュです。



お問い合わせ↓
（株）佐多商会ヴィタリテ事業部　担当：岩沢
Tel.　03　3582　5087